

医療ルネサンス No.5291

がん共生時代 番外編



「ぴあナース」の全国研修会でグループに分かれて議論をする参加者(那覇市で)

ぴあナース
<http://www.peer-nurse.com/>
正力厚生会
<http://shourikikouseikai.or.jp/>

闘病体験 看護に生かす

汗ばむ陽気となった那覇市の沖縄県青年会館に今月17、18日、全国から看護師11人が集まった。職場も年齢も様々な彼女らに共通するのは、がんを患った経験があること。自らの経験を患者支援に生かそうと、「サバイバーナースの会『ぴあナース』」(那覇市)の研修会に参加したのだ。

同会代表の上原弘美さん(45)は、病院看護師として働いていた37歳の時、左胸の乳がんと診断された。その後、反対側の胸と卵巣にもがんが見つかり、計3回の手術と放射線治療、ホルモン療法を経験した。「がんになって初めて、患者と医療者の間に、すれ違いや遠慮があることに気付きました」と、上原さん。忙しいような医師に聞きたいことがなかなか聞けず、点滴の処置などの時に、看護師が声をかけてくれないと冷たく感じた。

患者会に参加すると、今度は逆に、医療者が誤解されているとも感じた。「病棟でがん仲間が亡くなった時、落ち込む自分に看護師が何も声をかけてくれなかった」と憤慨する患者がいた。だが、「患者仲間の死に触れたら、傷つく人もいるかもしれない」と、看護師として、自分もあえて触れないことはあった。

両方を経験した立場なら、患者の気持ちに寄り添い、保坂さんから、がん患者に表れる精神症状や、精神科への連携が必要な重要な症状の見分け方などの講義を受け、グループに分かれて事例検討も実施。医療ソーシャルワーカーからは支援制度を学び、臨床心理士のグループ作業では、がん体験者でも受け止め方は全く異なることを実感した。

い、医療者との懸け橋になれるのではないか。聖路加国際病院(東京都)精神腫瘍科医長の保坂隆さんに相談すると、「体験を生かして、がん患者の心のケアができる看護師を育てよう」と協力を約束してくれた。

2010年10月、「ぴあナース」を設立。当初は県内の看護師だけだったが、今回は初めて全国に募集をかけ、埼玉、愛知、宮崎などから参加があった。保坂さんから、がん患者に表れる精神症状や、精神科への連携が必要な重要な症状の見分け方などの講義を受け、グループに分かれて事例検討も実施。医療ソーシャルワーカーからは支援制度を学び、臨床心理士のグループ作業では、がん体験者でも受け止め方は全く異なることを実感した。

くらし 家庭

(岩永直子)

(次は「シリーズ感染症肺炎」です)